

太田豊子

主のみ名を讃美申し上げ

上山教会百年祭を記念いたしまして、私の受洗の拙い証を申し述べさせて頂きます。

大正十五年、置賜の片田舎に仏教徒の墮頭の家に生まれ、箱入り娘のような存在で成長。

昭和十七年米沢女子高卒業後、仏教の寺で三ヶ月合宿、精神修業（当時の農村女学校）

昭和十九年、同村の中流家庭に結婚

昭和二十二年、長女を出産（その頃から夫に女が出来る）

昭和二十七年、離婚、夫の幸福を希つての離婚でしたが、八年間も連れ添うと、なかなか未練が残り、この土地に

居たままれず、何もかも忘れようと思つて初めて東京に行つて働きました。

その時から百八十度転換です。人に使われる身は初めて、煎餅布団に寝かされて、夜になると幾度泣いたことか分りません。地方の堅い職場で働き出しては、その度毎に上司の誘惑に憤りを感じ、職場を転々。

子供はお姑さん達が可愛がつて育てて下さり、時々逢わせて下さったりで感謝でした。

その間にも、夫は度々復縁を迫りますが、私の苦しみは、たとえ敵にでも、させたくない想いでしたので……後で考えますとこれが、良かったのか悪かったのか？分りませんが……

四年がかりで漸く諦めました。

昭和三十一年、私が三十一歳、実娘九歳、現在の夫と再婚。夫、五十二歳、夫の実娘十九歳お陰様で二人共素直に成長しましたが、六年生の時、前夫自殺。娘は中学校に入つてから友達に誘われて上山キリスト教会に通い始めました。

再婚というのは仲々難しく、「敵の娘も後妻にはやるな」と昔からの譬とか申しますが、増してや連子、籍なしの後妻二十一歳も年が違いますと、世俗的考えから財産目的とか警戒され束縛され、私のような凡人には世の荒浪を乗り越える事容易でなく考えぬいた揚句、娘が西校一年を終つた時娘を茨木キリスト教シオン学園に転校させ、私は東京に出て家政婦として働きました。派遣先からは大変信用され、「人間至る処静座在り」と泌み泌み思つたものでした。

其々私の身体は虚弱体質、前夫との離婚まで悩みの揚句、自殺未遂、神経衰弱の後遺性からか、精神的肉体的に無理が入ると、お腹が痛み出します。その頃から何処のお医者さんでも病名が判らず、病間~~びま~~違いられて二回も切腹せられました。

娘が大学二年生の時でした。

私が離婚再婚と自分勝手な行動に左右されている間、娘は幼い時から、どんなに犠牲になり精神的負担が大きく耐え忍んだことか……。

どんな償いをしてでも追付かない、私の苦しい想いに、娘の幸を希つて、せめて卒業まではと、身を粉にして働いたも